

市長メモ

No.10

「訪中雑記」

五月二日から十日までの九日間、十七名の市民による「日中友好大館市民訪中団」を組織し、中国を訪問してきました。熱烈歓迎を受け、友好交流の実をあげることができました。

報告は別の機会にして、ここに幾つかの感想を述べて国際交流の一助にしたいと思います。

部分で判断するな

面積で日本の約四十七倍、人口で約十倍、そんな大中国です。



故宮太和殿

ら、わずか十日足らずの訪中で、中国はこんな社会でしたなどとはとても言えません。ただ言えるのは、数字の正しさを実感させられたことであり、人々の物の見方、考え方に大陸性、大國性がうかがえたことです。

近代化計画が順調に進むならば、ほどなく経済大國になるのではないかと肌身で感じとってきました。

歴史と伝統に誇り

どこの史跡、名所もそのスケールの大きさは驚くばかり。特に、最近出土されている埋蔵史跡と文化の数々、そしてまだ可能性がたくさん残されていることに、中国人民は強い誇りと自信を持っていることがよく分かりました。それが飛躍への土台となっていることでしょう。

日本流に表現すれば、



右が范承德市長



大変な労働力と金、物、そして時間の搾取の集積とも言えます。しかし中国の人々は、「中国人民の歴史的な連帯性と技術の産物で、世界に誇るべきもの」と評価しているのです。

決して飾らない

范承德市長「今は経済的には御市に及ばないが、近いうちに対等になります。それが私の仕事のすべてです。——この言葉はいつまでも残るでしょう。」

承德市、人口約三十四万人、年の財政規模日本円で約四十一億円。この収入源はすべて、市内で生産される石炭、機械製品、

農産物、絹製品等々で、税金は無し。ただし、この四十一億円で一年間の人民生活すべて(学校、老人ホーム、道路、鉄道、病院等々)を賄わなければならないから大変です。と率直に話してくれました。

富は人民の生産意欲一つにかかっている。だれのために、何のために働くのかを知るには、少しの時間の問題だと言っていました。

水との闘い

北京から北の農業を車窓から眺め、話題にしてみました。今年是中国も暖冬で、すでに水不足に悩まされているとのこと。あちらこちらで地下水の吸い上げ風景が見られ、水のあるところ緑多しを実感するとともに、水との闘いこそ農業のすべてであるなと思いました。さらに、北京と承德の都市近郊では、施設農業が始まっており、これが本格化したら日本への影響も少なくないだろうと深い思いがよぎりました。

小学校

長木小学校と東中学校からの絵画と版画を携えて小学校を訪問しました。授業中でしたので多くの時間はとれませんでした



が、宿題帳を見せてもらいました。四年生で既に方程式を学んでいること、漢字は四角い目字をさらに四等分、八等分して字の形を整えるなど、その指導等にはびっくりしました。しかも二度にわたる文字改革で、日本との共通字が少なくなっていくことに、事情はともかく、一抹の寂しさを感じてきました。

何はともあれ友好交流の道が開かれました。日本文化と深いかわりを持つ中国、そして取り戻すことのできない過去の過ちを持つ日本。今後、信頼と友好を深め広めることこそ、日本の、そして私たちの責務であると考えます。

六月三十日、あの「花岡事件」の日も近付きます。新たな思いを込めて、御霊の冥福をお祈りしなければなりません。